

# 大果報御書

文永一〇年九月

五二歳

者どもをば少々はをひいだし、或はきしゃうかゝせて、はうにすぎて候ひつるが、七月末、八月の始めに所領かわり、一万余束の作毛をさへかられて、山野にまどひ候ゆへに、日蓮なをばうじつるゆへかとのゝしり候上、御かへりの後、七月十五日より已下いしばいと申す虫ふりて、国大体三分のうへそんじ候ひぬ。をほかた人のいくべしともみはず候。これまで候をもいたゝせ給ふ上、なに事もとをもひ候へども、かさねての御心ざしはうにもすぎ候か。なによりもおぼつかなく候ひつる事は、とのゝかみの御気色いかんがとをぼつかなく候ひつるに、なに事もなき事申すばかりなし。

かうらい・むこの事うけ給はり候ひぬ。なにとなくとも釈迦如来の法華経を失ひ候ひつる上は、大果報ならば三年はよもとをもひ候ひつるに、いくさ・けかちつゞき候ひぬ。国はいかにも候へ、法華経のひろまらん事疑ひなかるべし。

御母の御事、経をよみ候事に申し候なり。此の御使ひいそぎ候へばくはしく申さず候。恐々。